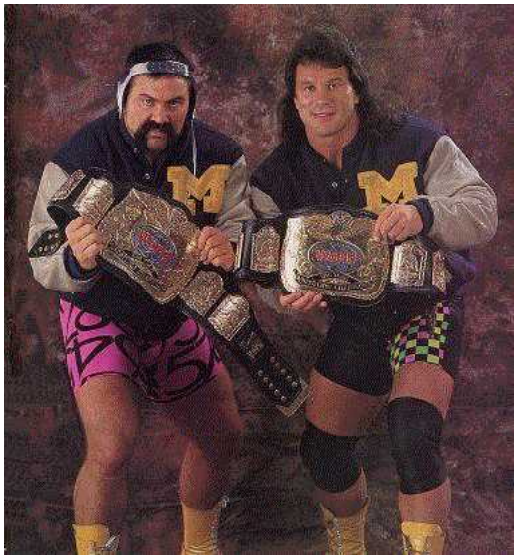
2018（平成 30）年度　格闘技観戦同好会　第 18 回観戦　　2.19（火）

スタイナー兄弟、来襲

－新日本プロレス、ＷＣＷ－



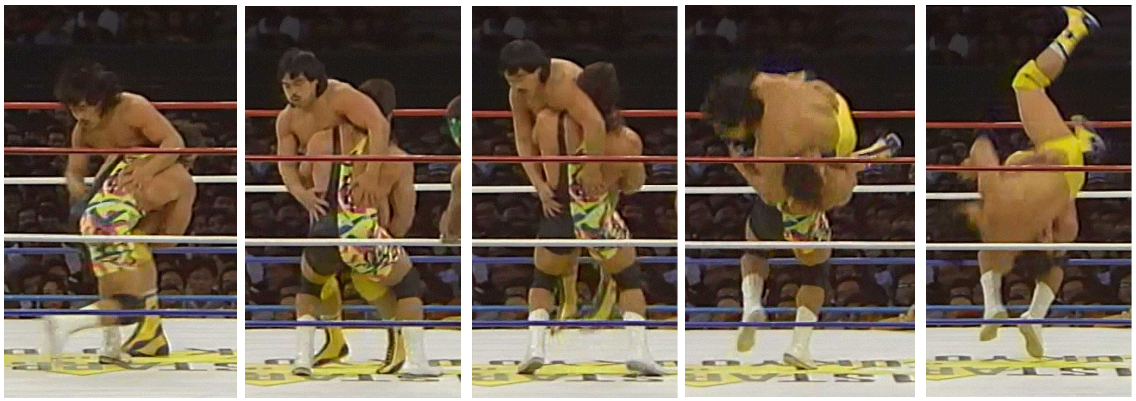
リック・スタイナー（左：兄）はミシガン大学出身で 1983 年の Big Ten Conference（大学スポーツリーグ）で第 2 位の成績をおさめ 1984 年にプロデビューした。

スコット・スタイナー（右：弟）はミシガン大学レスリング奨学生で、1983 年に NCAA 選手権出場、1984 年にロサンゼルス・オリンピック強化選手となり、1986 年にプロデビューした。

兄リックは 1987 年 2 月に新日本プロレスへ初来日、スティーブ・ウイリアムスと共に IWGP タッグ王座決定リーグ戦に参加している。弟スコットは 1991 年の東京ドームが初来日であった。兄弟共にアマレスの動きにパワー・ファイトをミックスした独特な技・ツープラトン攻撃で圧倒的な強さを示したタッグ・チームであった。

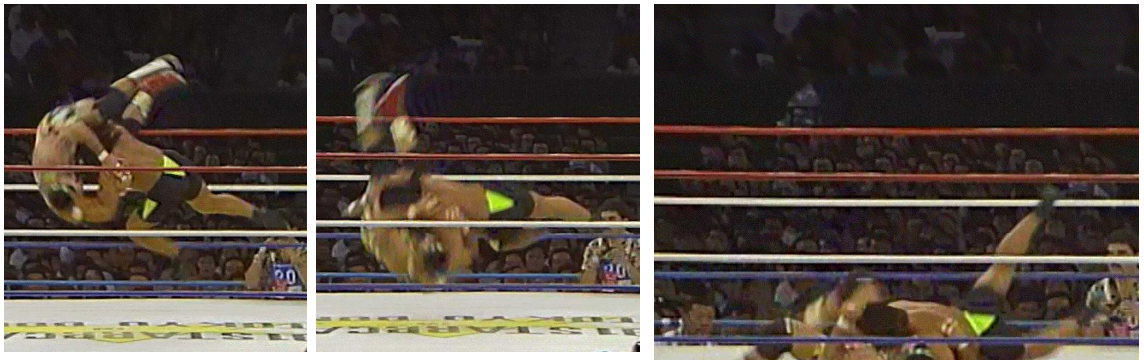
① 1991 年 3 月 21 日　東京・東京ドーム
（ＩＷＧＰタッグ選手権）
馳浩／佐々木健介　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

スタイナーズ初来日の相手は前年末に先輩チーム（スーパー・ストロング・マシン／ヒロ斉藤）から IWGP タッグ王座を奪取した馳健コンビ。映像資料で研究したはずであるが、実際に肌を合わせてみると、変則的な闘い方に翻弄されてしまっている。馳も 1984 年にロサンゼルス・オリンピックに出場（予選敗退）した猛者なのだが、スコットがタックルで入りとそのまま持ち上げ、そこから捻りを加えながらの反り投げで馳をマットに叩き付ける。馳はショルダー・スルーの要領で投げられるかと思いきや、スコットの反りがきついので高角度バック・ドロップのような状態で後頭部から真っ逆さまに落ちていく。

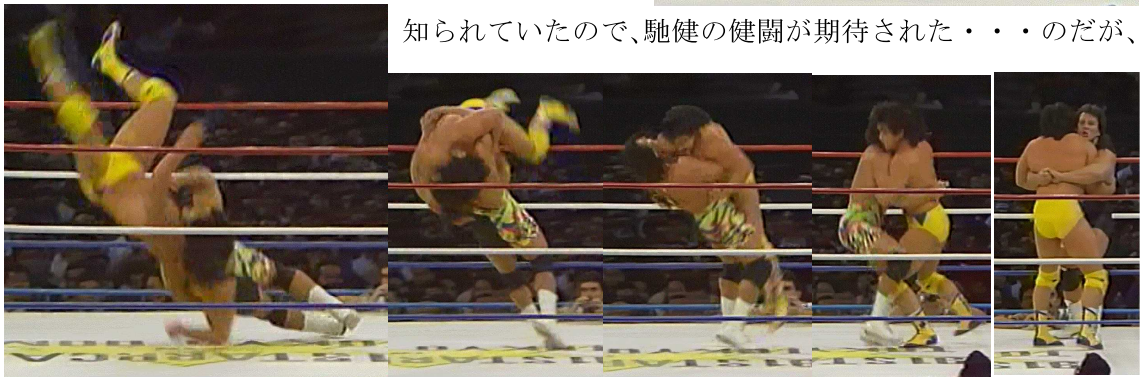


右の写真にあるように、タックルから持ち上げられた時にはこのように落とされることは予想できない。受け身が達者な馳でも試合序盤からダメージを負わされた。

大舞台でのタイトル・マッチということで健介も気合いが入っている。この頃は愚直なまでの直線パワー・ファイトが信条であった健介は、ロープ・ワークをジャンプでかわそうとしたリックを空中ですくい上げ、そのまま捻ってパワー・スラムの要領で叩き付ける。筋肉質で強そうな兄弟と充分対等に渡り合っていけるという印象をドームの観客に植え付けた。ちなみにこの空中で相手の身体をキャッチするパワー・スラムは、1987年の新日本プロレスに来日したバズ・ソイヤー（1959 ～ 1992）が初披露した技である（ちなみに 1987 年 8 月の国技館で長州が星野勘太郎に見せている）。



リックは初来日で変わり者だが強豪であることは知られていたので、馳健の健闘が期待された・・・のだが、



スコットが馳を相手にした時のレスリング仕込みの投げが余りにも迫力があり過ぎ、〝IWGP タッグ王座危うし〟の気運が高まってしまう。上のコマ送りは右から左に見ていくもので、回転・捻りながらのベリー・トゥ・ベリー（変形スロイダー・スープレックス）である。弟スコットに刺激されてか、兄リックも馳に投げっぱなしのジャーマン・スープレックスを見せる。この時の投げっぱなしジャーマンが日本初披露で、全日本プロレスでは三沢光晴らが真似をしている。受け身上手ということで馳は散々な目に遭ってしま

うが、そこはオリンピック経験者の意地を見せてくれる。下のコマ送りはは左から右へ見

てもらう。馳の正調・フロント・スープレックス。反り投げのスピード・角度が申し分なく美しい。スタイナー兄弟のスープレックスは身に纏った筋肉パワーで力尽くに引っこ抜く（それなりにブリッジは効かせている）と表現できるが、馳のスープレックスは下半身・腹筋・背筋を一体化させて〝ヘソで投げる〟もので、技術的には馳に軍配が上がる。

兄リックが試合中に奇声をあげたり、笑ったりと奇行を見せて相手を困惑させるのだが、弟スコットがしっかりと技を出せる状況をつくりあげ、これまた斬新なツープラトン攻撃をみせる。スコットが健介を肩車で担ぎ上げると、コーナー最上段からのダイビングしてのブルドッキング・ヘッドロックだ。この体勢からこの技を合わせようという発想はこの兄弟だからこそできたものだろう（ちなみに挑発の意味合いで試合前半に馳健がチャレンジしたが失敗している）。

フィニッシュは衝撃の日本初公開のフランケン・シュタイナー。輸入ビデオでは視聴できていたが、プロレス専門誌のコマ送り解説では全くイメージがつかめるものではなかった。カメラの角度が良くないのだが、健介目線で見ると、正面跳びのドロップ・キックかと思いきや、スコットが両脚で健介の頭部を挟み込む。そして腹筋・脚力で両脚に挟まれた健介の頭がマットへまっしぐらに刺さっていく。健介は受け身をとっているが、初体験の技の衝撃にカウント 3 を聞くほかはなかった。

② 1992 年 5 月 17 日　アメリカ・フロリダ州ジャクソンビル・メモリアル・コロシアム
（IWGP タッグ王座挑戦チーム決定戦）
藤波辰爾／飯塚孝之　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

飯塚がまだ本名「孝之」（たかゆき）で頑張っていた時、会社も蛍光ピンクのショートタイツを履かせてアイドル的キャラクターで売り出していた頃の試合である。映像出典は

新日本プロレスが発売していたビデオマガジン「闘魂 V」からの抜粋である。実況は田中秀和リングアナウンサー、解説は馳浩である。ふたりとも飯塚のことが好きなのでイジっているのだが、単純に飯塚の頑張りとふたりの茶化しがスイング

して面白くなっている。試合はスタイナーズの持ち味が存分に発揮されるアメリカでの試合だが、藤波・飯塚はともによく自分たちのプロレスを展開している。フィニッシュは圧巻の雪崩式フロント・スープレックス。

③ 1992 年 8 月 11 日　東京・両国国技館
藤波辰爾／飯塚孝之　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

先に観戦した 5 月のアメリカでの対戦のリマッチ。初っ端から飯塚が果敢に奇襲攻撃で主導権を握ろうとする。アメリカでの対戦と同様、藤波・飯塚は自分たちのプロレスを見せながら善戦している。フィニッシュはすっぽ抜けのフランケン・シュタイナー。

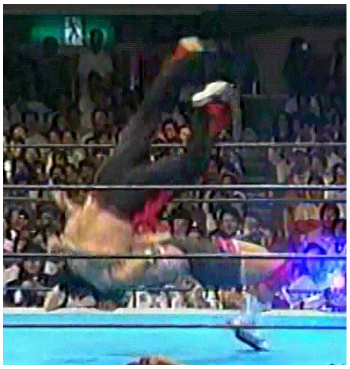
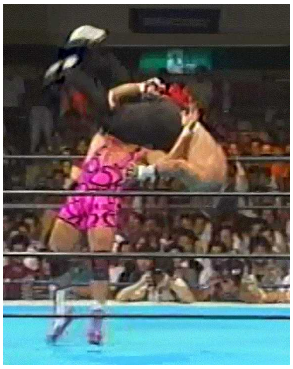
④ 1992 年 8 月 10 日　東京・両国国技館
マサ斎藤／長州力　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

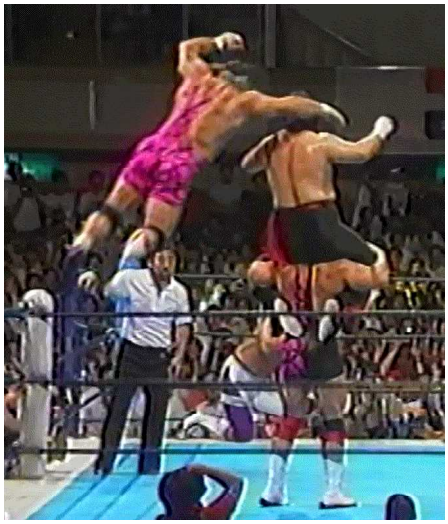
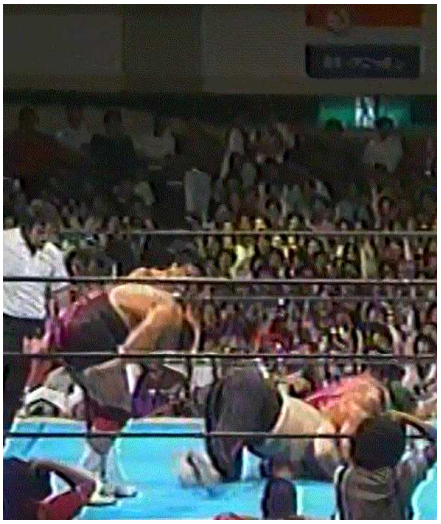
「NWA 世界ヘビー級王座」を賭けた'92G1 クライマックスの番外編における対戦。いずれもレスリング・テクニックに長けているので、間合いの詰め方から細かい技の応酬が

興味深い。長州はラリアット 3 連発で兄弟を圧倒、マサ斎藤はスコットに必殺・監獄固めを見せ、歓声を一身に浴びる。しかしスタイナーズがマサ斎藤を合体ブルドッキング・ヘッドロックでとらえてフィニッシュ。

⑤ 1992 年 8 月 16 日　福岡・福岡国際センター
（IWGP タッグ選手権）
リック・スタイナー／スコット・スタイナー　VS　橋本真也／蝶野正洋

G1 トーナメントを制覇して NWA 世界ヘビー級チャンピオンになった蝶野が「破壊王」橋本を従えてスタイナーズに挑む。兄弟共に 135 kgの橋本がいとも簡単に宙を舞うのは驚きだ。スコットは日本のプロレスを適応するため、日本人レスラーが使

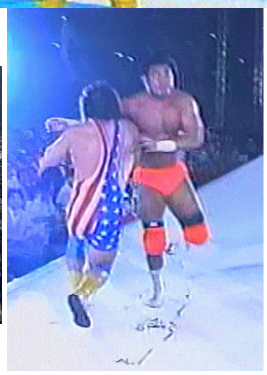



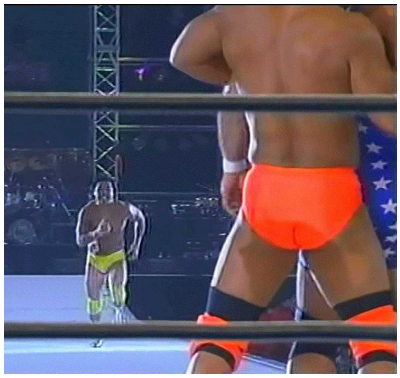
う技を真似て習得している。橋本は得意の重爆キックを見せるが、筋肉の鎧をまとったスタイナーズをノック・アウトするには至らない。蝶野も世界タイトルを獲ったとはいえ、古傷の首が悲鳴を上げている状態なので、スコットの寝技で苦悶する。蝶野・橋本は共にシングル・プレイヤーなので、タッグ・タイトルには不向きであり、兄弟の連携に橋本が捕まる。フィニッシュは合体ブルドッキング・ヘッドロック。リックがヘッドロックの状態から落下している時、スコットが橋本の膝を持ち続けているので、橋本が頭からマットに突っ込んでいる。

⑥ 1994 年 1 月 4 日　東京・東京ドーム
武藤敬司／馳浩　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

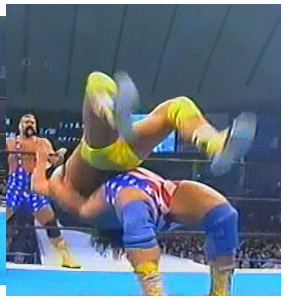
年末の SG（スーパー・グレード）タッグリーク戦の覇者である武藤・馳組がスタイナーズと激突する。ドームでの試合だが、両チーム共に序盤から慎重な探り合いを見せる。スタイナーズのダブル・リフトアップあたりから試合が動き始める。武藤がスコットを場外花道に放り投げてブレーン・バスターでダウンさせ、花道ダッシュのクローズ・ラ



イン。ドームという舞台であることを意識して、ダメージを与えるというよりも観客を盛り上げる為の武藤なりのパフォーマンスだ。リックが花道に傾れ込んでくると、武藤は馳に指示を出しつつリックをブレーン・バスター。馳はもうダッシュする準備ができている。



馳も長距離ダッシュからのクローズ・ライン。この武藤・馳の陽気さによりドームの観客が暖まった。これ以降、しばらく武藤・馳がスピーディーなタッチ・ワークで試合の主導権を掌握する。だが馳の逆水平チョップの連打を受けたスコットがチョップを返しざまにフルネルソン、そのままスープレックスへ。いったんスタイナーズに試合の流れが傾きか



けるも、チョップや裏投げで馳、そして武藤がペースを引き戻す。ここから暫くシーソーゲームの展開へ。すると突然スコットが観客に向けて大きく叫び（よく見てろよっ！）、馳をブレーン・バスターの体勢に担ぎ上げる。馳の身体の角度がおかしい、どうなる？

と観客が固唾を呑んだ瞬間、スコットがジャンプ。〝危険過ぎる〟と誰もが思ったところ案の定、馳が真っ逆さまにマットに突き刺さっていく。戦慄的衝撃が走る。これが新技「スタイナー・スクリュー・ドライバー」の初披露である。だが馳もフラフラになりながらもスコットを

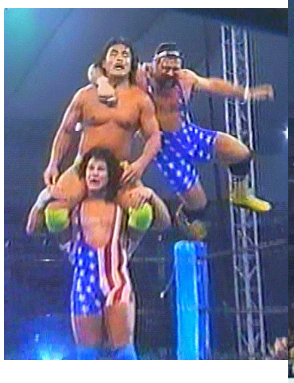
裏投げ2連発で押さえ込む執念を見せる。武藤に代わった馳はエプロンで当然のことながらダウン。悪気は無いのだが武藤がやっと立ち上がった馳をリングに入れて、自分はダイ

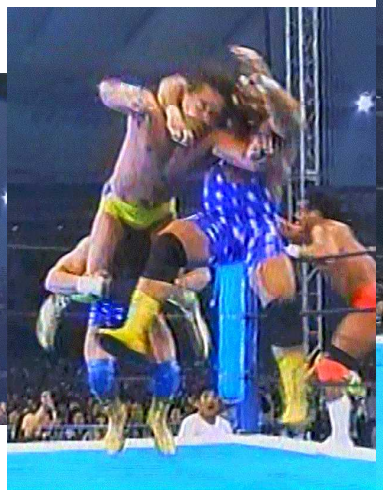
ブしスコットにフェース・クラッシャーを見舞う。尽かさず馳がスコットを高角度ジャーマン・スープレックス、続いてノーザンライト・スープレックスでとらえるも、残念ながらいずれもカウント3に至らず。ちょっと前に強烈なドライバーを受けているにもかかわらず、馳のブリッジは見事である。シングル・マッチならばフォール勝ちできたであろう会心のスープレックスであった。このあと武藤もスコットにラウンディング・ボディ・プレス（ムーンサルト・プレス）を炸裂するが脅威の粘りでスコットは2カウントで跳ね返

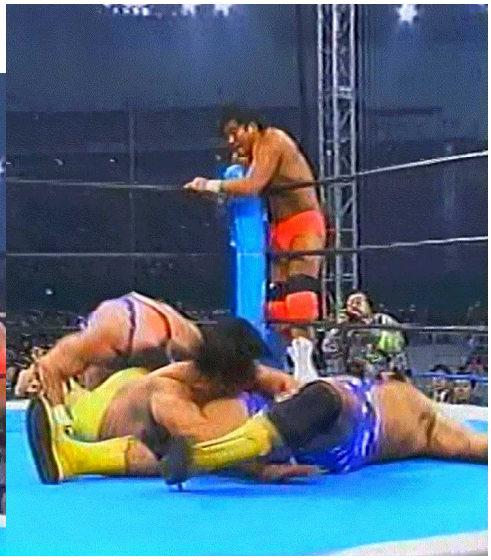
す。不用意に武藤がロープに走ったところ、カウンターでフランケン・シュタイナーで迎撃された。武藤の〝しまった〟という表情、そしてスコットの大腿部で武藤の頭部がガッチリと挟まれ、そのままマットに突き刺さる。さしものスコットも攻撃され続けていたの

でフォールに行けない。体力を温存していたリックが武藤・馳を蹴散らし勝負に出る。

既に〝死に体〟の状態になっている馳をリックが担ぎ上げ、スコットが雪崩式 DDT。少々横に流れてしまった感があるものの高さによって相殺される。さらに今度はスコットが馳を肩車に担ぎ上げ、背後からリックがダイビングしてのブルドッキング・ヘッドロックだ。武藤のカットも間に合わない。リックが斜めに飛んだため腕が馳の首に引っかかった際、遠心力でリックの体が振り回されてしまい、結果として馳の顔面がリックの大腿部に落ちてしまう。ただでさえ受け身のとり辛い強烈な技を連続で食らっているのに、その上でアクシデント的な状況もあってレスリングの名手である馳であっても万事休す。年末のタッグ・リーグ覇者が完膚なきまでに叩きのめされてしまった。これで武藤・馳組は１年間「打倒スタイナーズ」を心に秘めて闘わなければならなくなってしまった。







⑦ **1994 年 9 月 23 日　神奈川・横浜アリーナ**

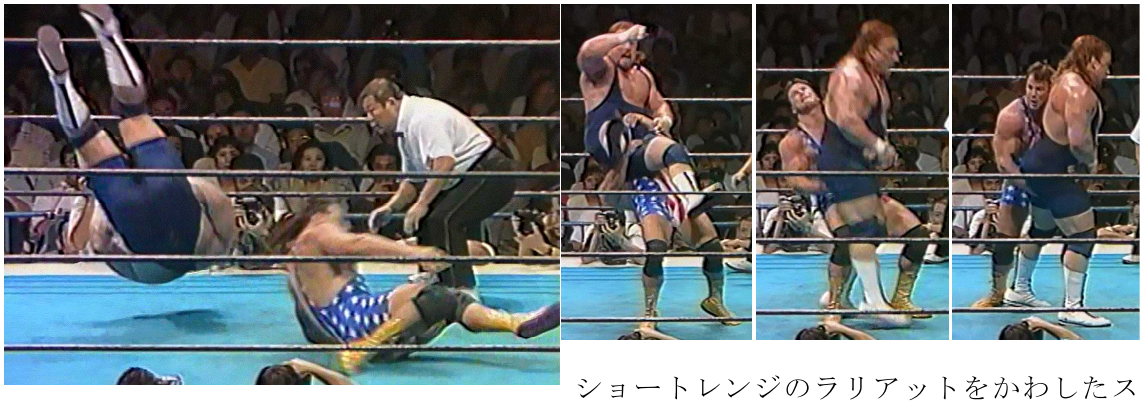
リック・スタイナー／スコット・スタイナー

VS　スコット・ノートン／クリス・ベノワ

ノートンは少年期よりアーム・レスリングに熱中、世界大会優勝・全米選手権 3 連覇を成し遂げ、1987 年にはシルベスター・スタローンの『オーバー・ザ・トップ』に出演している。ロード・ウォーリアーズのホークと高校の同級生で、米国ブラッド・レイガンス道場でトレーニングに励み、1989 年にプロデビューを果たした。1990 年初来日、1993 年にはヘラクレス・ヘルナンデスと「ジェラシック・パワーズ」を結成して IWGP タッグ王座を獲得している。

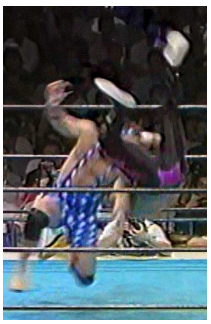
クリス・ベノワは少年期よりダイナマイト・キッドに憧れ、カナダ・ハート道場に入門、1985 年にプロデビューを果たした。1987 年に初来日、新日本プロレスに練習生として入門し新日本流の修行を積んだ。新日ジュニア時代にはペガサス・キッド／ワイルド・ペガサスと名乗った（武藤やライガーは愛称「ペガ」で呼んでいた）。終生〝青い眼をした日本人レスラー〟であった。

この試合は'94G1 クライマックス・スペシャルでの対戦。ノートンはスコットのフルネルソンを力で外し、タックルで吹き飛ばす。観客の響めきがタックルの威力を物語る。序盤はパワー満タンのノートンが一人でスターナーズを蹴散らす場面が多い。

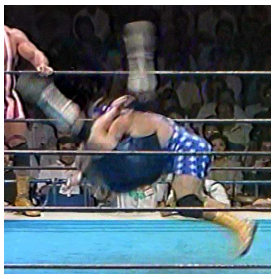


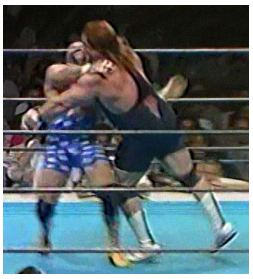
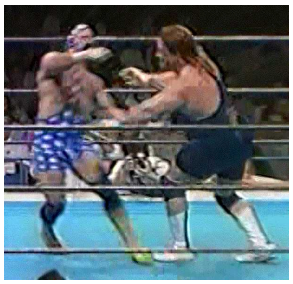
ショートレンジのラリアットをかわしたスコットがノートンをスープレックスで放り投げる（左の写真はリバウンドしたところ）。だがノートンは立ち上がりざまにランニングしてのラリアット 3 連発＋ジャンピング・ショルダー・タックルでスコットをダウンさせ、外国人対決の醍醐味を示す。珍しくへバるスコットだが、コーナーでスプラッシュを受けた直後、反撃のベリー・トゥ・ベリーで 150 kg超のノートンを投げ飛ばす。両チーム交代でリックとベノワがレスリング

で勝負する。体格で劣るベノワだが新日道場で培った技術で対等以上の闘いを披露する。リックの不用意なクローズ・ライン連発をかわしてのジャーマン・スープレックスはスピード・ブリッジ共に芸術的なもの。だがリックはロープ・ワークをジャンプでかわそうとしたベノワの身体を空中でキャッチし、そのまま回転させてスラム。圧倒的パワーを誇示する。



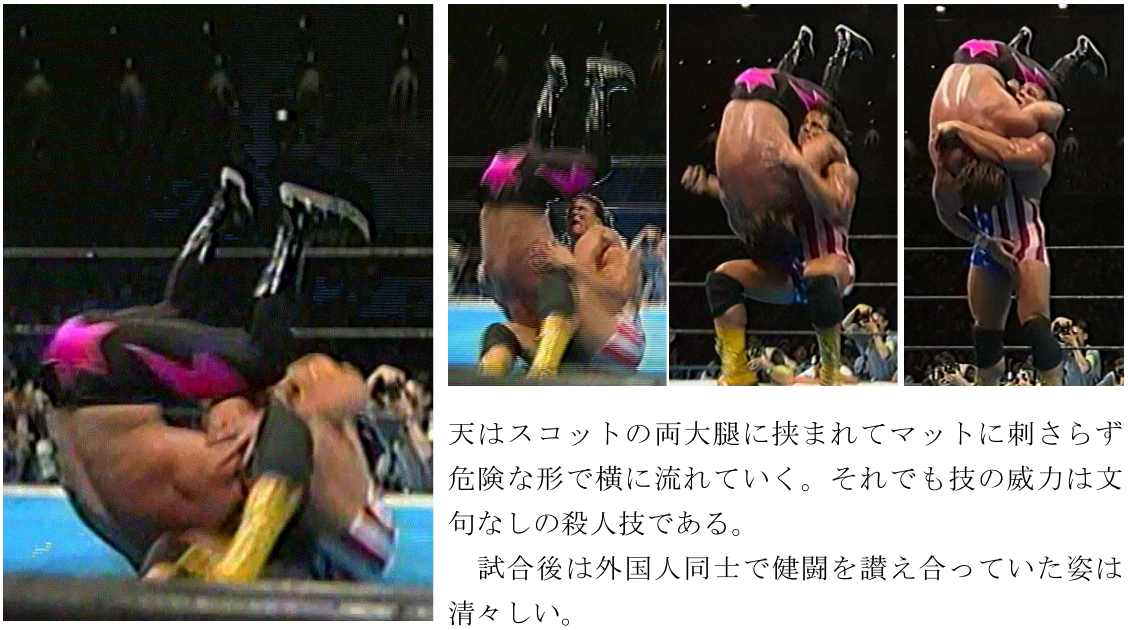
ベノワがノートンに代わり、リックとノートンのパワー対決。両者は 1991 年 11 月の日本武道館で武藤・馳組との IWGP タッグ王座決定戦で組んだことがある。対戦すれば互いに意地でぶつかり合うが、単純にパワーではノートンには叶わない。ノートン



が勢いに乗って突進してきたところ、リックは払い腰の要領でノートンの巨体を受け流しながらのスラムで叩き付ける。パワー＋技術で一歩も引かない意地を見せる。スターナーズはベノワが出てくると早めのタッチ・ワークで孤立させ、ベノワにダメージを蓄積させる作戦に移っていく。結構な時間、ベノワはひとりでスタイナーズの攻めを受けまくる。ノートンがスタイナーズを蹴散らした好タイミングを逃さず、ベノワが反撃に転ずる。ノートンがコーナーにす

えたスコットを、雪崩式フランケン・シュタイナーで頭からマットに突き刺す。直ぐにスコットの攻勢が始まるが、雪崩式バック・ドロップを空中で切り返し、さらにコーナー最上段からのダイビング・ボディ・プレス。ベノワはヘッド・バットを狙ったらしいが、距離が近かったためにプレスになってしまったようだ。もう一度コーナーに上がったところ、雪崩式フロント・スープレックスで叩き付けられ、ベノワは勝機を逸してしまう。乱戦模様の中、ベノワはスコットに担ぎ上げられ、恐怖の SSD で真っ逆さま。だがベノワの脳



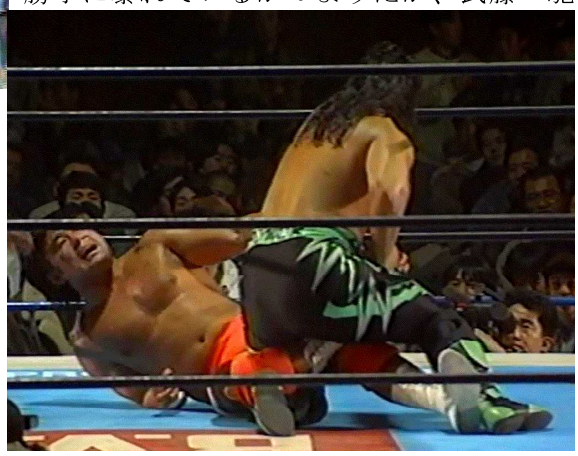
天はスコットの両大腿に挟まれてマットに刺さらず危険な形で横に流れていく。それでも技の威力は文句なしの殺人技である。

試合後は外国人同士で健闘を讃え合っていた姿は清々しい。

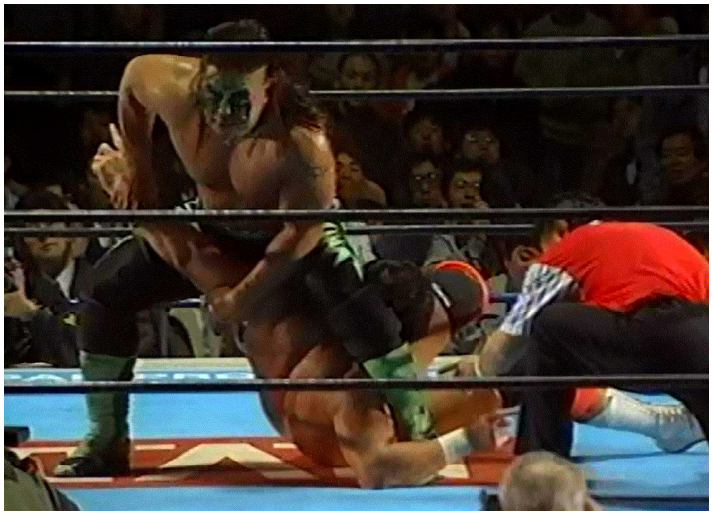
⑧ 1994 年 11 月 25 日　岩手・岩手県営体育館
（IWGP タッグ選手権）
ホーク・ウォーリアー／パワー・ウォーリアー　VS　武藤敬司／馳浩

'94SG タッグリーグ 2 連覇を果たした武藤・馳組が、リーグ戦で勝利した IWGP タッグ・チャンピオン・チーム「ヘルレイザース」（ホーク＆パワー）に挑む。ヘルレイザースにすればリベンジ・マッチ。ノー TV ながら撮影が入るタイトル・マッチということで岩手の観客のテンションは高め。武藤・馳は序盤、ホークに代わる代わる攻撃をしかけるが、ダメージは殆ど与えられず、却ってホークのタフネスさが際立ってしまう。パワー・ウォ

ーリアーは佐々木健介のギミックであるが、健介とは似て非なるファイターとしてキャタクターを確立している。テクニックで上回る馳・武藤に翻弄されるが、ヘルレイザースとしてのタッグ・ワークを重視して、健介時代の孤軍奮闘に陥ることが無い。ホークもロード・ウォーリアーズの荒くれパワー・ファイトとは異なり、日本のプロレスを意識したグラウンドも見せ、溌剌とした武藤・馳の動きを封じ込める。一見、ホークが好き勝手に暴れているかのようだが、武藤・馳

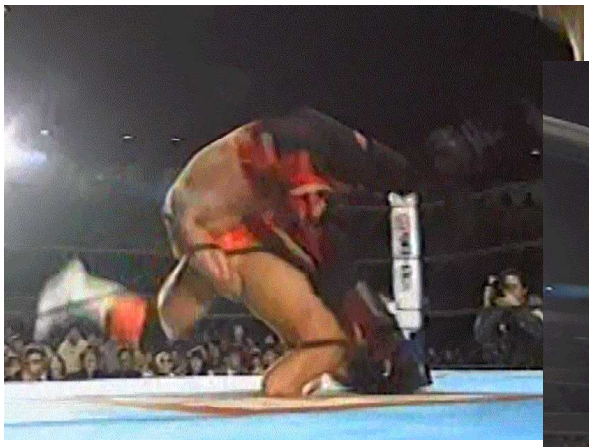


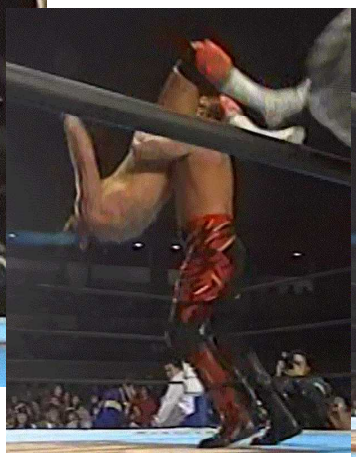
に勢いが傾くと力で流れを塞き止め、パワーが力攻めと固め技で押し切っていきやすい状態を作っている。ウォーリアーズ時代のホークのグラウンド技やブレーン・バスターなど殆ど見たことは無い。パートナーのパワーを引き立てながら、ヘルレイザースというチームを大切にしていることが判る。パワーも健介時代だと武藤や馳に〝勝てない〟もどかしさを観客に感じさせていたが、パワーに変身したことで闘魂三銃士や馳



と同じ目線で闘うことが出来るようになった。ペイントはマスクと同じ別人格になる魔法である。ホーク＆パワーのタッチ・ワークがスムーズに流れていく。2 年ほどのチームだが、長年組んでいるようなバランスのとれた攻めが武藤・馳を相手にできているのもホーク＆パワーが互いに尊重し合っているからであろう。ヘルレイザースが馳を戦

闘不能に追い込み、武藤を標的に試合を決めようとダブル・インパクトを出すが、ホークのラリアットを武藤が首をすくめてかわしてピンチを脱出する。このタイミングで馳が生き返りパワーを場外に誘い出す。ホークが武藤を慣れないパワー・ボムで上げようとすると、体重移動により武藤がウラカン・ラナに似たフランケン・シュタイナーでホークを丸め込むことに成功した。ホークは受け慣れない技で固められたため返すことができなかった。SG タッグリーグ覇者が IWGP タッグ王座も手にし、いよいよスターナーズへのリベンジに出陣する。





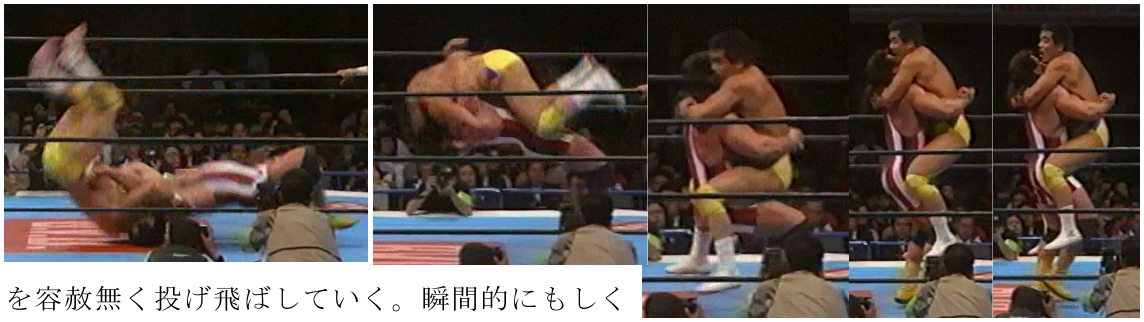
⑨ 1994 年 12 月 12 日　大阪・大阪府立体育館
武藤敬司／馳浩　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

武藤・馳組の IWGP タッグ戴冠は想定されていない時点でのマッチ・メークだったのでノン・タイトル・マッチとなった。両チーム共にプロレス・ナイズされたレスリングで競い合う。バックを取られた武藤が腕をとり、スコットが身体を密着させて防御するとリ

ストを掴みながら自分の腕とスコット腕の間をくぐり、優位な体勢からリストを極めていく武藤の細かい技術が披露される。するとスコットも上体を起こしながら武藤の右脚をと

って武藤のリスト・ロックを外し、武藤をテイク・ダウンさせトゥーホールドの体勢に。これを武藤が脚力で反転させリバース・インディアン・デスロックへ・・・。両者共にこのように次から次へと攻め手が移り変わっていく高度な攻

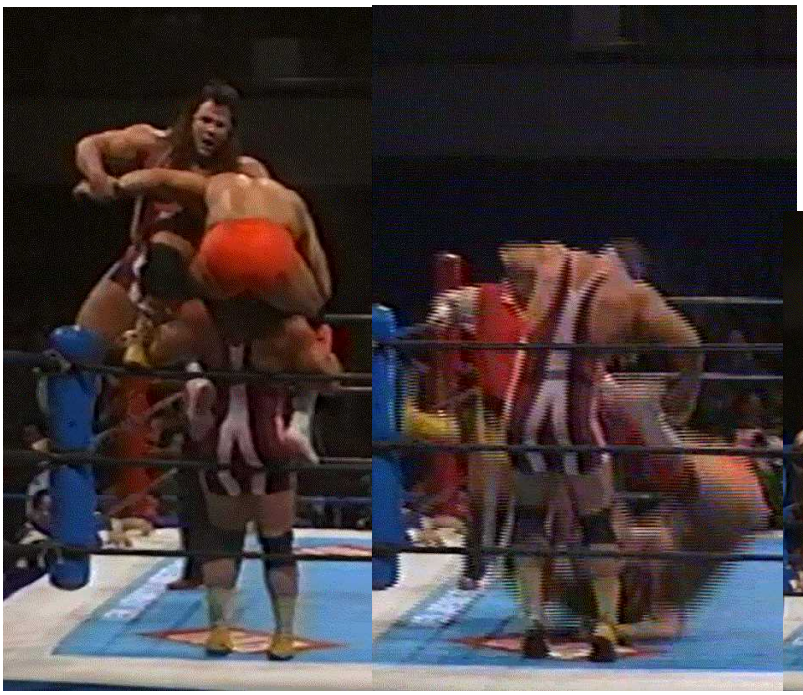
防を見せる。スコットはレスリング的に手の合う馳



を容赦無く投げ飛ばしていく。瞬間的にもしくはタメをとっての投げなので受け身のタイミングが技によって異なるので、馳でもダメー

ジを受けているのが判る。リックもトゥー・ホールドを反転してロープに逃れようとする馳を引っ張り込んで投げっぱなしのジャーマン・スープレックス。馳の身体が首を支点にグニャりと曲がる。終盤、武藤・馳が攻勢のチャンスを掴み、武藤のラウンディング・ボディ・プレスで仕留めにかかるが、強靭なリックはこれを

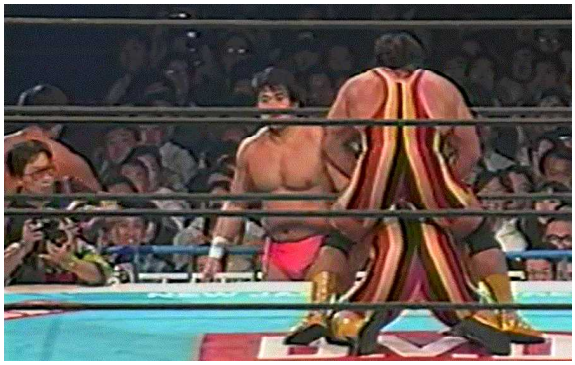
自力でキック・アウト。馳の裏投げから武藤が再度ラウンディング・ボ ディ・プレスを狙うが逃げられて自爆。すると直ちにスコットが馳を SSD で K.O.し、スタイナーズは合体プレーで武藤を葬ろうとする。コーナーに上がったスコットは何故か息を吹き返した馳が足を引っ張り、その隙に武藤がリックを前方回転式エビ固めで丸め込む。タイミングはバッチリだがリックはこれを返し、立ち上がった武藤にスコットがダイビング・クローズ・ライン。スコットの移動スピードは驚愕である。リックが武藤を投げっぱなしジャーマンで叩き付け、その上で合体 DDT でマットへ真っ逆さまに突き刺す。IWGP タッグ・チャンピオンが又してもスタイナーズに完敗を喫してしまった。年始ドーム大会に暗雲が立ち籠める。



⑩ **1995 年 1 月 4 日　東京・東京ドーム**

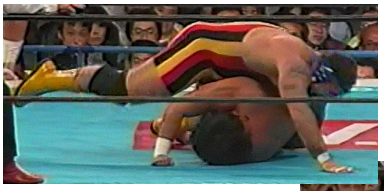
武藤敬司／馳浩　VS　リック・スタイナー／スコット・スタイナー

武藤・馳組にとっては待ちに待ったドームでの雪辱戦だが、大阪での前哨戦は惨敗。ベルトは獲ったがスタイナーズには一度も勝利していないというジレンマに陥った状態での



ドーム決戦である。試合序盤に前年と同様にダブルのリフトアップ・スラムで叩き付けられ、見栄も張られてしまう。

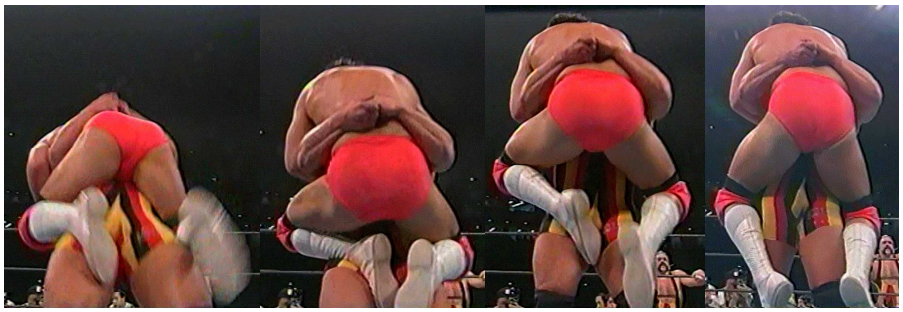
武藤がリックをグラウンドに引き込むが、

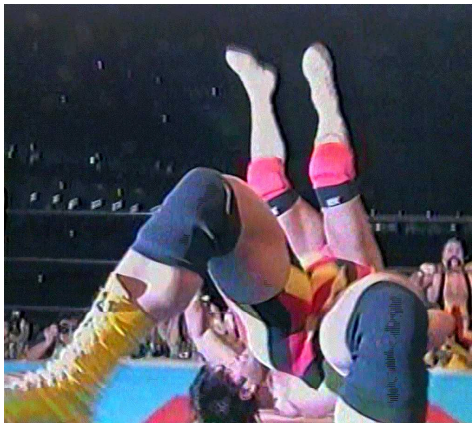


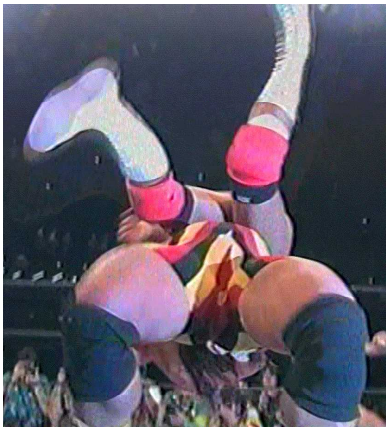
リックは体重を乗せたり、脚・腕を絡めて武藤に何もさせない。スコット相手だと切り返しができたのだが、リックのグラウンドが手強

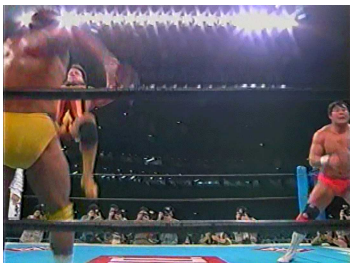
いということが、この攻防から判明する。武藤・馳は早めのタッチ・ワークでスコットをつかまえる。交代で足四の字固めなどでダメージを蓄積させていくが、馳がスタンドで放った逆水平チョップに怒ったスコットが瞬時にスープレックスで掬い上げた馳をマットに叩き付け、一瞬で形勢が逆転されてしまう。又しても馳がリック・スコットそれぞれに担

ぎ上げられてコーナー・ポスト叩き付けられ、ジワリジワリと体力を消耗させられていく。武藤が流れを変えようとリック相手にドーム花道ダッシュのクローズラインを見せるが、リックが身をすくめてかわし、後方のスコットの迎撃に遭ってしまう。既に馳はスコットのダブルアームからのスラムでダウンしており救援できずにいた。武藤・馳組には好ましくない展開が目立つようになってきた。スコットは武藤をロープに振り、返ってきたところをベア・ハッグにとらえ、タメをつくってからヘソで投げるフロント・スープレックス。頭から落とされた武藤の上体が跳ね起きるほど、威力のある反り投げであった。この後もスコット・リックは投げ技を入れながら固め技で武藤のスタミナを奪っていく。前年は馳を押さえたので、この年は武藤からフォール勝ちを狙っているのだろうか。武藤の孤立した辛抱が続く。救援に入った馳もスタイナーズに攻撃され、武藤・馳が共にロープに振られる。馳はスコットのフランケン・シュタイナーを食らってしまうが、武藤は体を反転してリックをロープに振り意地のフランケン・シュタイナーを見せる。スコットが試合権利の無い馳をフォールしていたため、少々武藤は休むことができたが、それでも投げっぱなしフルネルソン・スープレックスで叩きつけられ、観客に見得を切ったスコットが SSD の体勢に入る。武藤はこれをツームストン・パイル・ドライバーで切り返し、馳に交代。短時間だが馳がスタイナーズに攻勢を仕掛けるも、つかまってしまい合体 DDT の体勢へ。これを巧く丸め込んだ馳が危機を

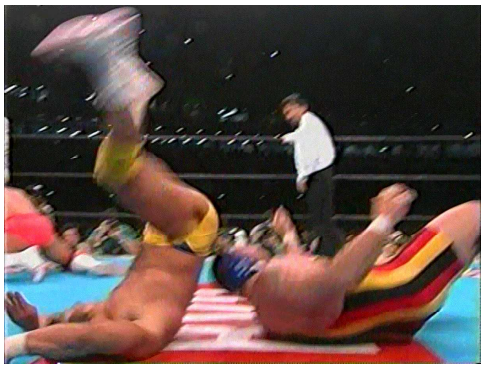








脱出。武藤はコーナーに取り残されたスコットに渾身の雪崩式フランケン・シュタイナー。これが見事にスコットの脳天をマットに突き刺す。実況・田畑祐一が「これはいつもと違うぞぉーっ」と絶叫、観客の心の声を代弁する。しかし、馳はリックにつかまり投げっぱなしのジャーマンスープレックスで危険な角度で後頭部から落下させられる。落ち方が



危なかったことからドームの観客の響めきが起こる。リックは返す刀で武藤にも投げっぱなしジャーマン。武藤が空中で体を返し、巧く着地しての

胸板から首にかけてのドロップ・キックをクリーン・ヒットさせる。そこに尽かさず馳が入り込んで、これまでスタイナーズに効き目が感じられなかったノーザンライト・スープレックスを炸裂させる。針の穴ほどの隙を見事に突いた、王者組の集中力の勝利であった。